

デューク大学に留学して

Duke University Medical Center

河野 まひる

(大阪大学大学院医学系研究科産科学婦人科学)

2021年2月より、米国ノースカロライナ州ダーラムのデューク大学に留学しています。思い返せば当初、2020年3月に出発するはずが、COVID-19が急速に蔓延したため、急遽延期したのです。荷物をまとめ、職場を去り、まさに飛び立たんとしたタイミングで、大学から開始を半年以上延期するよとの連絡がきたのです。日本で状況を見極める時間ができたことにほっとする一方、どうしたらよいのかと途方にくれました。それから9ヶ月紆余曲折を経て、ようやく2021年に渡米しました。

ノースカロライナは、大阪と緯度は変わらず、気候もよく似てすごしやすい地域です。今春には梅や桜が目を楽しませてくれました。ダーラム周辺には教育機関や研究施設が集中しており、リサーチトライアングルという都市圏を形成しています。これは夫婦で留学するには、選択肢が増えるという意味でありがたく、主人は隣接するチャペルヒル市のノースカロライナ大学チャペルヒル校に留学しています。日本とは桁違いのCOVID-19の感染者数に、不安を抱えていましたが、ここは自然とソーシャルディスタンスが保ててしまうようなのかな地域で、幸い身近に危険を感じることはありません。最近ワクチンが普及し、社会活動も徐々に再開され活気がでてきました。

私の留学先であるCapel研究室は、性腺の発生を研究テーマとしています。私はもともと産婦人科医で、抗癌剤治療による卵巣機能障害を何とか克服できないか、という研究関心を持っており、同研究室への留学を志したのでした。研究室はポスドク4名、大学院生3名、国際色豊かなメンバーでとてもフレンドリーな雰囲気です。組織透明化と3Dイメージングを得意とする研究室で、胎生期マウス性腺のような微小な構造もうまくとらえ、各自の研究テーマに活かしています。研究者のバックグラウンドが多彩なので、ディスカッションを通して多くを学ぶことができ、刺激的な研究生活を送っています。

デューク大学での研究環境として優れている点は、イメージングやフローサイトメトリーを始めとする先進機器を専属のスタッフが管理し、大学内で共有していることです。専門的なサポートを受けながら、迅速に研究を進めることができます。また、共同研究も盛んで、研究室同士の垣根が低いことも印象的でした。すばらしい研究環境に支えられ、研究に専念できることに感謝しています。とはいいつつも、COVID-19の影響でミーティングはすべてオンライン、研究室内の人数制限のためシフトを組んでの実験が続いています。皆それに慣れているので、驚くほどスムーズに制約下で研究をこなしていますが、事態が改善するこ

とを願ってやみません。

最後になりましたが、快く留学に送り出してくださった大阪大学産婦人科の木村正教授、ご支援賜りました上原記念生命科学財団の皆様に、深く感謝申し上げます。